生活科　自分自身の成長に気付き，くらしを豊かにしていく生活科学習
― 学び合いの中で気付きを広げ深める ―

1　生活科で願う豊かな学びの姿

本校の生活科では，次のような子どもの姿を願っている。

○ 身近なひと・もの・ことに直接はたらきかける姿
○ 経験したことや考えたことを自ら表現できる姿
○ 伝え合うことで生じた気付きをもとに次の活動をする姿
○ ふりかえりをする中で気付きの質を高めていく姿
○ 自分自身の成長に気付き，くらしを豊かにしていく姿

このような姿を目指すために，子どものくらしを掘り起こし，豊かな体験を積み重ねていけるようにしていく。そのために，一人一人の子どもの姿をとらえ，はたらきかけを重ねていくことで，単元を通して気付きの質が高まるよう，学びを支えていけるようにしていきたい。

2　生活科における思考力・判断力・表現力とは

本校生活科では，思考力・判断力・表現力を以下のようにとらえている。

【思考力・判断力】
　自ら関心・意欲・願いをもって対象に直接はたらきかける中で，疑問をもって考えたり，試したり確かめたり，工夫したりする。
【表現力】
　感じたことや考えたことを自分なりの表現であらわしたり，ことばで伝え合ったりする。

低学年では，思考・判断が常に繰り返されており，子どもたちの表現を見ていても，思考であり，判断でもあるととらえられることが多い。したがって，この二つは未分化であると考え，【思考力・判断力】とした。また，子どもたちは，本来関心のあることに対して「やってみたい」「○○してみたい」という願いをもっている。そして，身近なひと・もの・ことに体全体で直接関わりたいという思う存在である。その中で，「なぜ○○なんだろう」と疑問をもったり，「どうしたらもっとうまくできるだろう」と考えたりしていく。また，試行錯誤の中で「Aの方法よりもBの方法の方がよさそうだ」と判断し，実行することで「やっぱりそうだった」と確かめ，生活に必要な技能や思考を身に付けていく。生活科における表現とは，ふりかえりや観察記録のようなものだけでなく，活動そのものを表現としてとらえることができると考えている。したがって，生活科において身につける思考力・判断力・表現力とは，関心・意欲をもちながら対象にかかわり，かかわる中で問いをもち，さらに学級で伝え合う中で次の活動への見通しをもち（「もしかしたら○○すればいいかも」「こっちの方法をためしてみたい」）もう一度その対象にかかわる（「１回目は○○だったけど２回目は…」「次は○○しよう」）ことで身に付けることができる力ということができる。

活動の中で常に思考・判断が繰り返され，その中で気付きを伝え合う場で表現することで，一人一人の気付きが明確化・共有化され，気付きの質が広がり深まっていく。その広がり深まった気付きをもちながら活動することで，さらに思考・判断し，単元を通して気付きの質が高まっていく。そして，その気付きを自分なりの表現を用いながら友だちに伝えることで表現力が高まっていく。このように，思考力・判断力・表現力が高まっていくことで気付きの質が高まり，気付きの質が高まることで思考力・判断力・表現力がさらに高まり，単元を通して一人一人の対象に対する気付きの質が高まっていくことを目指している。（**図１**）

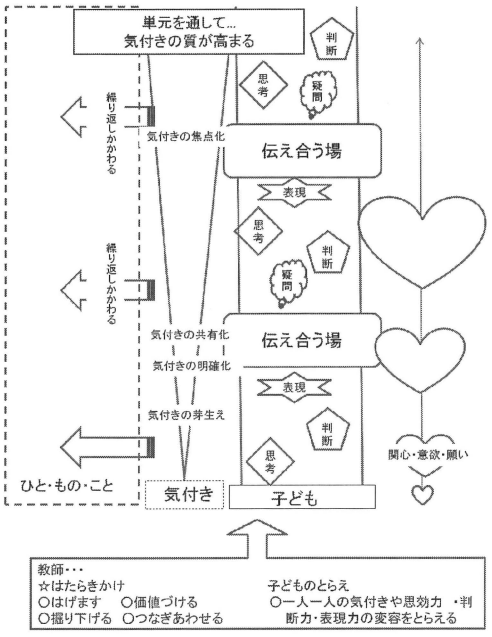

図１

低学年でのこうした学習の積み重ねにより，これ以降の学年で，ひと・もの・ことへこだわりをもち，かかわり合いながら追求していく姿につながっていくと考えている。

3　思考力・判断力・表現力を育成するために

(1) 学びをいかす

子どもたちは，活動に意欲的に取り組めば取り組むほど，たくさんの気付きをもち，その気付きをまた次の活動へ，また，日々のくらしの中で取り入れようとする。また，「できるようになってうれしい」「もっとこうしたい」という思いや願いをもちながら活動することにより，自分自身の成長に気付いたり，新たな課題を見つけたりする。このように，学んだことをくらしと関連させている姿や学んだことを実感し，新たな課題を見つけている姿を生活科での学びをいかす姿であると考える。

子どもたちが学んだことをいかすためには，単元の中で体験活動と伝え合う活動を繰り返すことが必要である。子どもたちにとって没頭して何度でも挑戦できるような体験活動の場や素材を用意し，気付きが広がり深まるように，活動したことやその中で気付いたことを伝え合う活動を繰り返し設定することで，思考力・判断力・表現力の高まりをねらう。思考力・判断力・表現力が高まるような学び合いの中で，子どもたちの無自覚な気付きが自覚できるようにし，さらにその後のこだわりをもった追求により，単元を通して学んだことをより生活の中で再認識したり，新たな課題を見いだしたりすることができるようにする。

(2) 学び合い

一人一人の思考力・判断力・表現力が高まるためには，学び合いを単元の中にどのタイミングでどのように設定するかも重要である。そこで，授業を構想するに当たっては以下の３点に留意する。

①「やってみたい」「できそうだ」と思える課題を設定する。

子どもたちが日々のくらしの中で何に目を向け，どんなことに心を動かしているのか，くらしや生活経験，思いなど，子どものくらしに深くかかわり，掘り起こす。そのためには，対話することや，様子を観察すること，日記を読むなどの手立てを通して，日々の子どものとらえを大切にしていく。

② 一人一人が自分の経験や発想をいかし，自由に活動できる場を設定する。

生活科では，とくに対象に直接はたらきかけることを重視するため，子どもが身体を使い自分の感覚をはたらかせ，思いきり活動できるための，空間と時間を保証する。

③ 類似した活動を繰り返し体験できる場を設定する。

子どもは１回だけの活動では，自分のしたいことが思い通りにできない場合が多い。そこで，類似した活動を繰り返す中で，子どもたちは思考・判断をはたらかせ，試行錯誤の上にさまざまな生活に必要な力や技能を身につけていくと考える。

上記の３点を踏まえ，子どもたちが「伝えたい」「他の友だちがどんなことをしているか知りたい」という願いや思いが高まったところで学び合いを設定する。その中で，どうしてもうまくいかない様子や，逆に大成功をしている様子などをとらえ，それを取り上げる学び合いを設定する。表現方法は，実際にその場でやって見せたり，実物をもって説明したりするなど，子どもの願いに寄り添って行うことができるようにする。一人一人のこだわりをもった追求や気付きが広がり深まるような学び合いを有効に機能させることで，子どもたちが自ら学びをいかすことができるようにしていきたい。

(3) 教師のはたらきかけ

単元を通して，子どもたち一人一人が，今何を願い，何に悩んでいるか，また，これからどのように学びをつなげていこうとしているかをとらえる。子どもに対して「できるようになるといいね」と励ましたり，「こうしてみたらどう？」と提案したり，「次はどうしようと思っているの？」と掘り下げたりするはたらきかけを行う。そうしたはたらきかけによって子どもたちは，「もっとできるようになりたい」「もっとこんなこともやってみたいな」と新たな願いや課題を見いだすことができると考えている。また，子どもたちの学びをより広げたり深めたりするためには，活動しているその場で直接はたらきかけるだけでなく，ふりかえりや日記などを一緒に見ながら対話することで，より学びを広げ，くらしにもいかそうとする姿が期待できると考える。

（文責　釜田　美紗子）

【参考文献等】
・原田信之・須本良夫・友田靖雄『生活科指導法』東洋館出版社，2011
・田村　学『今日的学力をつくる新しい生活科授業づくり』明治図書，2009